

老年期をどう生きるか 心の健康

文部省選定

教育映画祭優秀作品賞

カラー 33分



福田忠好さん
(68歳)

佐藤のぶさん
(72歳)



田村弘さん
(68歳)



西島金吾さん
(83歳)



■監修■ 前国立精神衛生研究所所長 加藤正明 日本精神衛生会常務理事 春原千秋

■協力■ 日本精神衛生会 全国精神衛生協議会

定価 16% 200,000円

VTR 55,000円

■すいせんのことば

聖マリアンナ医科大学 神経精神科教授 長谷川和夫

老年期は、すべての人々のゆくてにある。若壮年期と異なって、身体的な老化のために病気にかかり易くなり、また社会的な役割りも少なくなって経済的にも依存することが多くなる時期である。この老年期に大切なことが、実は“心の健康”なのである。映画『老年期をどう生きるか—心の健康』は、この重要な問題を映像によって、生き生きと描写してくれた。

4人の老人が、それぞれの生活環境にあって一生懸命に生きてゆこうとする姿がありのままに描かれてゆく。自分ひとりの生活を作ろうとする老人、働くことと勉強することに生きがいを求める老人、自立生活をもちながらも、夕食時には子供家族との団らんに楽しみを求める老人など、ここに描かれた老人達は、ごく普通のおとしよりであるが、生き方はそれぞれ特異であって、老年期を生きることの豊かさと悲しさを教えてくれる。

健康と経済と、そして心の健康・生きがいは老年期の三本柱である。そのなかでも心の健康をしっかりと老人達の具体的な生活を通して、美しく描くことにこの映画は成功した。おとしよりの方々はいうまでもなく、若い方々にも是非ごらん頂くことを強くおすすめしたい。

■すいせんのことば

日本老年社会学会会長 那須宗一

これまで老年期というと、とかく暗い面ばかり強調されがちであったが、これからは肯定的にみていく時代ではなかろうかと思う。

この映画は、老年期に意欲的に取り組んでいる4人のおとしよりの生活ぶりを紹介している。

ごく普通の市井の人達なのだが、どの人も型にはまって生きているのではなく自分流の老年期を編みだそうと努力している様子がよく判る。こんなにも様々な生き方があるのかと見る者に勇気をわかせる画面である。

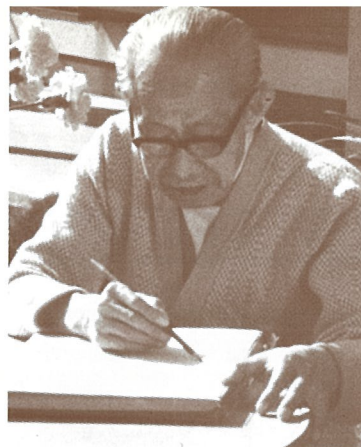
これから老年期に入ろうという中年の人々にはもちろん、若い人々にも老年期の認識と心構えをもってもらうため、一見をすすめた映画である。

■スタッフ

製作……………福間順子
脚本・演出……………田中 徹
撮影……………植松永吉
音楽……………長沢勝俊
録音……………矢野勝久
解説……………中村 正

— 心の健康シリーズ —

働きざかりの精神衛生
— ストレスをのりこえる —
16ミリ・カラー・30分
190,000円



■解説

前国立精神衛生研究所所長 加藤正明

「老年期をどう生きるか」という課題は、現在中高年期にある人はもちろん、若壮年期の人にとっても、大きな宿題であることは改めていうまでもないことでしょう。今後ますます人口の老齢化が進むとともに、老年期の生き方が大切な問題になってくることは間違いありません。

この映画は実在する4人の高齢者の方に、実名でおのおのの生き方を示して頂いたものです。4人の方はいずれも「体の健康」と「経済的余裕」の点では、まず恵まれた方だといってよいでしょう。しかし老年期の生き方には、この2つの柱のほかにいわゆる「生きがい」という柱が必要になります。趣味をどういするか、家族とくに夫婦、親子の支えがどうなっているか、近隣社会との繋がりができているか、毎日を積極的に生きようとする本人の自立心などが、この「生きがい」と密接な関係にあります。

絵にも音楽にも多彩な趣味を持つ福田さんは、毎日アトリエに出勤して、自分の才能を生かした孤高の生活を楽しんでおられます。その意味で満ちた老後といえるのでしょうか。30余年勤めた学校での生徒たちとのコミュニケーションを続けようとしています。家族ことに奥さんや子どもたちとのコミュニケーションはどうなのでしょう。一日だれとの会話が最も多いのでしょうか。体調をくずされた時、家族や近隣との繋がりの重要性に気づかれたのではないのでしょうか。

老人大学の生徒会長、遊園地の管理人、緑の番人、ミニSLの保安要員などの多くの仕事を抱えて、飛び歩いている田村さんは、誠に健康そのものに見えます。仕事人間だった生き方がそのまま延長されたような生活で、いそがしい毎日です。社会のために大変役立っているのですが、「殆んど家にはいない」という妻の不満と「収入がガクンと落ちた寂しさ」とを、どのように解決したらよいかという課題があるように思われます。仕事も大切ですが夫婦の結びつきをさらに大切にしたいものです。

謡いにラジオ体操や指圧に、毎日いそがしい佐藤さん。20年前にご主人に亡くなられ、3年後に遺稿集を出した

時から、個人として生きる決心をされ、老人ホームも途中でキャンセルして今の生活です。趣味が同時に生活の糧であり、子どものように思うお弟子さんを持ち、独立して生活できる佐藤さんです。ことに、すぐ近くの息子夫婦の家へ夕食を食べにいくという支えがきわめて大切であり、両者の関係がますますよくなっていくことを望みたいと思います。

83歳で独り暮らしの西島さんは、生来の朗らかな性格もあって、いつも亡妻の写真とお守りを肌身離さず、墓参も欠かしたことはありません。老人アパートの世話役、高齢者事業団のピラ配り、友人の病院見舞いなど、屈託のない毎日です。ことに娘さん夫婦の支えが大きな力となっており、同居せずに独り自由な生活をしながら、洗濯ものなどは頼める関係にあるわけです。きつぷのいい神田っ子のほほえましい老後ですが、温かい家族や近隣の支えを大切にしたいと思います。

この映画をご覧になって、体の健康の保持と経済的余裕のほかに、老後の生き方がいかに重要か、それはいかにあるべきかということ、ご自身の問題として、また自分の親の問題として考えて頂きたいと思います。「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」といいますが、老後の生き方も若壮年期から作られた甲羅が大切なのだと思います。それは画一的のものではなく、「生きがい」は自らが決めるものだと思います。

■対象■

一般成人（中・高年、青年）。

■利用の方法■

「老年期を迎える心の準備をどうするか」「明るい老年期をどう生きるか」等の話しあいの資料として。

成人学級、婦人学級、老人大学、保健所の講座、職場組合の学習会等、学級講座の教材。

社会教育指導者、保健婦、職場の管理者、リーダー等の研修会・講演会の資料として。

■製作■

株式
会社

桜映画社

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

■配給■